

2019 12 DEC No.375

ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

CONTENTS

けんちくカフェス 支部大会 2019 けんちくカフェス「此処から～」 「JIA 東海支部大会 2019」——	2
関口 啓介	
データで見る「けんちくカフェス」	2
中澤 賢一	
けんちくかに何ができるか	3
中澤 賢一	
けんちくかなしのけんちく	4
澤村 喜久夫	
けんちくかはどこへ向かうのか	5
道家 洋	
「けんちくカフェス」に参加して	6
北川 佑亮	
「けんちくカフェス」を振り返って	6
吉元 学	
わたしのとっておき⑭	7
谷村 茂	
保存情報 第 217 回 登録有形文化財：長母寺	7
尾関 利勝	
地域会だより	8
Bulletin Board	8
編集後記	8
伊藤 彰彦・黒川 喜洋彦	
JIA の窓 実際に人が暮らし始めた住宅を、その設計者の案内で拝見	表 3
山田 尚紀	

表紙撮影：寺井真理(最上段右・最下段左・中)

表紙

けんちくカフェス「東海支部大会 2019」は 9/23 (月)～ 9/28 (土) の 6 日間、名古屋市西区那古野の円頓寺商店街・四間道を会場に行われた。6 日間で 10 の事業を開催。21 名の講師を迎え、JIA 正会員だけでなく、準会員・学生・一般の市民を含む延べ 455 名が参加した。

昭和・平成から令和となった新たな時代に、これまでの支部大会とは異なる長期開催、まちを会場に行われたけんちくカフェスは、JIA の今後につながる様々な成果と課題を示しつつも、盛況に終わった。

けんちくかフェス「此处から～」

「JIA 東海支部大会 2019」



Endōji shōtengai

9月23日から28日の6日間にわたり開かれたJIA 東海支部大会2019けんちくかフェス「此处から～」のフィナーレは、円頓寺のアーケードにわたしたと吉元地域会長と矢田支部長が宙を舞う熱狂のうちに幕を閉じた。円頓寺界隈を拠点に地域の方々や市民研究者、学生、建築士会、建築関係者とJIA内外を問わずに繰り広げられた取組は、予定調和の着地点を持たない社会実験のようなものであった。延総参加者は455人にのぼり、会員以外の一般の方や学生の参加者が多かったのが特徴的で、地域社会に出て動く公益社団法人の姿勢が受け容れられたものであり、また求められていることが

確認できたといえる。

人口減少期に入り閉塞感を強める非寛容な社会は、建築やわたしたちに対して厳しい眼差しを向けている。自然を変更し環境を破壊してきた建築は、その立ち振る舞いを律する時にきている。この取組を通してわたしたちは、産業の遺構やまちの形跡、風土や受継がれてきた地域に根付く慣習、現在のシステムに埋もれ居場所がなくなりつつある人的資源のネットワークなど、建築が掘り起こして光をあてることで生きるものが数多く埋もれていることがわかった。

建築は時代や社会を孕みながら人間性に内在する光と闇を映し出してきたとい

える。また、まちや建築はそれらを投影するだけでなく、人間の活動の展開可能性を用意する舞台として日常や非日常を彩り支えてきたのだから。西欧では権力や産業の為のものであった建築が人々に解放されて今まで以上の輝きを放っている。わたしたちの周りにあるまちや建築も、輝きを放つ日を待ちわびているのかもしれない。建築にできること、しなければならぬことはまだまだあることを印象づけた6日間であった。



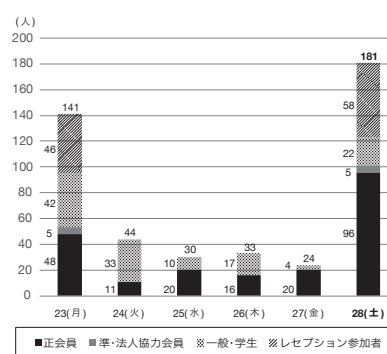
関口 啓介 (JIA 愛知)
けんちくかフェス実行委員長

❖ 従来大会との比較 データで見る「けんちくかフェス」

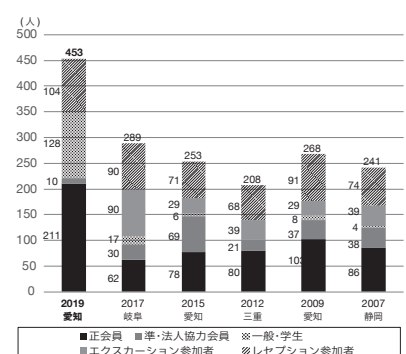
○ 会期中 (9/23～9/28) の参加者内訳

		23(月)	24(火)	25(水)	26(木)	27(金)	28(土)	小計
正会員	静岡	0	0	0	1	0	1	2
	愛知	41	10	20	14	21	90	196
	岐阜	4	0	0	0	0	3	7
	三重	1	1	0	1	0	1	4
	他支部	2	0	0	0	1	1	4
	小計	48	11	20	16	22	96	213
準会員・法人協会員 (賛助会)		5	0	0	0	0	5	10
一般 (学生含む)		42	33	10	17	4	22	128
レセプション (まちなかパーティ)		46	-	-	-	-	58	104
計		141	44	30	33	26	181	455

【図1】6日間の参加者内訳



【図2】過去大会との参加者の比較

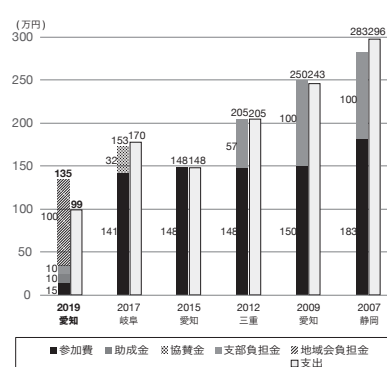


● 過去5回の支部大会との比較

年度	2019	2017	2015	2012	2009	2007
開催地	愛知	岐阜	愛知	三重	愛知	静岡
会期	6日	1日	1日	2日	1日	2日
参加者数 (エキスカン含む)	10	2	2	3	2	6
参加者数 (延べ人数)	455	289	253	208	268	241
正会員静岡	2	10	9	12	14	29
愛知	196	33	61	38	70	38
岐阜	7	10	3	4	10	5
三重	4	9	5	24	8	10
他支部	4	0	0	2	7	4
小計	213	62	78	80	103	86
準会員・法人協会員	10	30	69	21	37	38
一般(学生含む)	128	17	6	0	8	4
エキスカン	-	90	29	39	29	39
レセプション	104	90	71	68	91	74
予算規模・支出額 (万円)	99	170	148	205	243	296
登録料 (※)	1.5	1.5	1.7	1.6	1.6	1.6
収入	14.7	141	148	148	150	183
助成金	10	0	0	0	0	0
協賛金	0	32	0	0	0	0
支部負担金	10	0	0	57	100	100
地域会負担金	100	0	0	0	0	0
計	134.7	153	148	205	250	283

※エキスカン・レセプションを含む全事業に参加した場合の参加費

【図3】過去大会との予算規模・収支の比較



6日間で参加者数が延べ455名と大盛況だったが、会期が長かったことで、参加者が分散(?)し、1日での最大参加者数が、これまでの支部大会と比べて、やや少なかった。

また、事業が分散したことで、他地域会からの参加が伸びづらかった傾向が見える。対称的に多様な事業の構成により、学生を始めとする一般の参加者がこれまでの大会に比べて多かったことで、より外に開いた大会になったと思われる。

今回、延べ人数で参加者数を割り出しているが、各日共、同様の会員が参加している傾向も見られ、より広く多くの会員参加に如何に繋げられるかは今後の課題と言える。

予算面では、2回のレセプション、多くの事業を開催した今回の大会だったが、これまでの大会に比べ、4～5割程度の予算規模に抑えられ、会員の負担が軽減されたことは、今後の参考となる大きな成果であった。

中澤 賢一 (JIA 愛知)

会報委員長

けんちくかに何ができるか



Shikemichi

大会初日、当初はあいちトリエンナーレ芸術監督の津田大介氏を迎え、講演会(奇しくも講演テーマは「現在の政治状況や社会の閉塞感をアートや建築が突破する可能性」)が開催される予定でしたが残念ながら中止となりました。結果、開催予定地の野外ステージが利用中止となり、他事業の開催場所・時間が告知後に変更される騒動の末、けんちくカフェスは始まりました。

◆「天使の森とSDGs」から「みんなのトイレ」を考える

開幕最初の事業は「天使の森」プロジェクトに関するシンポジウム。登壇者の小原淳氏(NPO法人アースワーカーエナジー理事長/小原木材(株)代表取締役)の発案で、NPOが整備管理している「天使の森」に利用者のためのトイレを学生とJIAで提案させていただくことになり、今回のシンポジウムは学生を含む参加者へのいわゆる課題説明の場となりました。さらにこのプロジェクトが、JIAが取り組むべきSDGsに合致するというので、JIA会長 六鹿正治氏も登壇されました。

最初に、六鹿会長からJIAがなぜSDGsに取り組むべきなのかが示されました。JIAの3つのミッション(建築家のリーダーシップ強化のアシスト/建築家の行政的課題の解決/建築界を代表した国際活動)を達成するためのひとつの手段として、世界で分野横断的に使える共通言語としてのSDGsを、建築家が社会とよりよく繋がるための言葉として利用すべきであり、だからこそJIAがSDGsの運動を主導すべきだ、とのこと。その上で、何より重要なことはSDGsを、以前からもともと建築家が行ってきた行為が社会に伝わる共通言語に置き換えられただけだと認識すべきで、あくまでSDGsは精神的な目標と捉えるべきだ、とのこと。この言葉が何より腑に落ちました。

続いて小原氏からはご自身の経歴と重ねて、「天使の森」プロジェクトを始めるに

至った経緯が説明されました。その穏やかな振る舞いの中に一本筋の通った、自身の感性を頼りに常に本質を見極めんとする姿勢に感銘を受け、お話に聞き入りました。星の王子さま(サン・テグジュペリ作)の挿絵が示す「大切なものは目に見えない」のメッセージに始まり、「産業を否定することなく」人と環境の調和を目指してNPOを設立されたこと、生命の循環の流れを感じるべく森林の再生、里山の暮らし、地域循環型産業を考え、「天使の森」を始められたこと、そこにはC.S.V(Creating Shared Value)共通価値の創造があり、その活動はENDLESSであること、ゆえにこの森にあるべきトイレは現地の材料で作られるべきで、すべてを自然に還し、奥山をつくるために作り込まないものであるべきだ、とのことでした。すでに小原氏の中では明確な構想があるそうですが、あえて抽象的な示唆に留められ、学生の自由な想像力とJIAの器量を試される結果となりました。

◆地区連絡会「まちなかフォーラム①」

- クロストーク「建築家の+介在」

フォーラム①では、芸術祭の中でのアーキテクトの役割を紹介いただくことで、通常の建築設計監理だけでなく、様々な場面でいかに建築家が社会に介在できるかが示されました。あいちトリエンナーレ2019で各地域を担当する「アーキテクト」3名(市美術館・四間道円頓寺:栗本真吉氏/豊田市駅~美術館:山岸綾氏/芸文センター:丸田知明氏)が一同に会し、さらにトリエンナーレ2016で豊橋会場に携わられた黒野有一郎さんが進行役を担当されるという貴重な時間となりました。

「アーキテクト」の役割は、契約上3項目(展示ディスプレイ計画の設計書・仕様書・図面の作成/展示ディスプレイ計画に関わる構造アドバイス/制作運営撤収に関わるアドバイス)ではあるが、実際はその他に担っている役割(作家・地権者・キュ

レータとの調整役/消防法対応の相談役/作品制作・コンセプト作りのアドバイス/見学者へ有効なサイン計画のアドバイスなど)が多岐に渡り、重く大きいとのこと。その点は通常の建築家の役割と似ているかもしれないと感じました。

具体的な寸法指示も無い作家の意向に沿った作品制作のための図面化、作品(展示空間ではなく!)の制作会社の選定、その品質監理等々、契約外で様々な事案に対応している現況を、実例を通して説明いただき、トリエンナーレの舞台裏を大変興味深く見せていただきました。

芸術祭において「アーキテクト」はあくまで作家を下支えし、様々な法的交通整理を行うだけの立場と思いきや、作品の見せ方、展示空間のあり方や演出など、作家・キュレータと同列で作品展示に向き合い、対応されていることに驚くと同時に、その重要性和建築家に関わることの意義と可能性を強く認識しました。

初日の事業は、いずれも卑近な建築作品や設計デザインを問う内容ではなく、建築家としての姿勢やあり方を問う内容で、自身の立ち位置を見つめ直し、初心に立ち返ることができた非常に有意義な時間でした。また、講演中に商店街を行き交う市民が、会場を興味深く覗き込んでいく姿が印象的でした。

◆まちなかパーティ

14時から4時間に及ぶ2つの事業の後、円頓寺商店街を象徴するアーケードを挟んで向かい合う2店で開催されました。特にアトラクションが用意されたわけではありませんが、そこにある場と人に向き合う時間となり、2店を行き交うそのにぎわいがアーケードにあふれ出し、盛況の内に初日は無事終了しました。

中澤 賢一 (JIA 愛知)
堀内建築研究所





❖9月25日(水) まちブラ

けんちくかなしのけんちく

第3日目、研究会まちなかフォーラムは、住宅研究会と保存研究会に加え、NPO法人なごや歴まちの会と愛知建築士会名古屋中支部との共同で企画した。

◆「まちブラ」：まち歩き

屋根神様見学を中心に円頓寺周辺を歩きながら「まちなかフォーラム」のテーマやキーワードを見つけ、その写真を撮り、持ち寄ることにした。

浅間神社に集合、四間道界隈に祀られている4箇所の屋根神様を見学し、その後自由に円頓寺商店街、美濃路、堀川などを廻った。このまちブラには愛知建築士会名古屋中支部企画の裏メニューもあった。ミシュランガイド東海版に掲載された懐石料理店「懐韻」でランチを楽しんだ後、トリエンナーレ展示会場となっている川伊藤家住宅と那古野一丁目長屋を見学するツアーが好評だった。

◆「まちなかフォーラム」：講演会・ワークショップ

まちなかフォーラム第1部は、写真集「なごやの屋根神さま」(1992年発行)の作者山地英樹氏(1931年生、名古屋市北区在住)をお招きし、写真集に掲載された当時の名古屋市内の風景や屋根神様の映像を見ながらお話を聞いた。写真業界誌の仕事に携わってきた山地氏は、名古屋に赴任されたことを機に、市内各所の史跡、名古屋港などを撮影し、個展を開いてこられた。名古屋特有の屋根神様は、毎月1・15日に祭礼が行われる。かがり火を焚いてお祀りする光景に惹かれて写真集を出版するに至ったそうだ。まち歩きで見た屋根神様も写真集に掲載されているが、すでに無くなってしまったものも多く、今となっては貴重な資料と言える。

第1部後半は、屋根神文化フォーラム副代表の矢部育男氏に屋根神様の概要について講演していただいた。

1. 屋根神様とは

- ・二階屋根の庇の下におかれ、町内や組を疾病や火災から守るためにお祀りされている小さな祠。
- ・屋根上にあるのは、昔庶民は長屋住まいで、社を建てる土地がなかったことや、神様は高いところに存在するもので、穢れることの少ない屋根上が最善と考えられたから。
- ・一般に火伏せの秋葉神社、厄除けの津島神社、氏神様(那古野神社、熱田神宮が多い)が祀られている。

2. 屋根神様の誕生・増加

- ・屋根神様は江戸時代の文献にも書かれ、世情不安が続いた幕末頃に、庶民の中から発生したと考えられる。
- ・名古屋で屋根神様が祀られるようになったのは、明治10～20年頃。
- ・大火、疫病、濃尾地震、日清・日露戦争などの世情不安が続き、明治30～40年代にかけて祀られたものが最も多い。

3. 屋根神様の減少

- ・第二次世界大戦の空襲で家ごと焼失した後、屋根神様は再興されなかった。
- ・敗戦で神様への崇敬心が薄れた。
- ・伊勢湾台風で飛ばされ再興できなかった。
- ・道路拡張による立ち退き。
- ・家屋の改築、商店街の改装。
- ・住民の減少、高齢化など

4. 屋根神様の分布

- ・名古屋市内約100社、瀬戸市約65社、津島市約25社、岐阜市約100社、高山市約63社、ほか古川町、美濃市、多治見市、三河地方の一部など

5. 祠の形式

- ①箱型：旧来の社殿に替え箱型に更新。屋根、ペランダ、庇下に祀られる。
- ②神明造り：切妻、平入り。伊勢神宮の社殿。古い社殿では檜皮葺、柿葺もある。
- ③板宮造り：流れ造りの変形。昭和以降このタイプが普及。

- ④唐破風造り：豪華・重厚な建築様式。
 - ⑤津島神社拝殿風：尾張造りと呼ばれる愛知県西部独特のもの。津島神社の拝殿を模す。
 - ⑥山形造り：住吉神社の建築様式で、春日造り。大型から小型まであり。
 - ⑦流造り：緩やかな曲線を持ち、美観豊かな社殿。
 - ⑧切妻造り(拝み造り風)：屋根の形は単純で、質素な趣がある。
- 矢部氏が活動されている屋根神文化フォーラムでは、毎年秋に「屋根神ウォーク」を開催している。今年は西区内の屋根神様を見ながら美濃路から枇杷島まで歩く企画を実施し、地域の歴史・文化の継承や活性化に取り組んでいる。



第2部は、「環境、文化、歴史、景観、コミュニティなど」のテーマの中から選んだキーワードをもとに、まちブラで撮影した写真を持ち寄り、建築談義を行った。筆者は堀川、堀川に架かる橋、堀川の水運と瀬戸電堀川駅、社寺、市街地再開発事業として建てられた那古野ビルなどの公益性について発表をした。



「まちブラ」
浅間神社境内
ここからスタート



屋根神様(那古野一丁目)
社殿形式は唐破風造り



澤村 喜久夫 (JIA 愛知)
伊藤建築設計事務所

この夏、そして秋と、愛知は騒がしかった。あいつり(あいちトリエンナーレ)の「表現の不自由展・その後」を巡るすったもんだが、その原因なのは言うまでもないが、この問題に対する応答や振舞いが、その人物のいわば「地金」のようなものを露わにしてしまうという意味で、色々な人に対する此方の見方を改めさせられるところもあった。なかんずく、愛知県知事の正しく保守的な態度と言辞には、私などは単なるネオリベの人と思いついでいただけに、不明を恥じつつその存在に大いに安堵した。

批評家の浅田彰氏は、今回のあいつりは「何となく表面的にステキなアートだなあ、というので終わるよりも、ずっと大きな意味をもった」、それは「歴史的にみればいいことだったのではないかと」、「不自由展」再開後の会期末、ホー・ツーニエン氏との対談で述べていたが、あいつりへの文化庁からの補助金不交付やら、その後の「ジャパン・アンリミテッド展」に対する大使館の公認撤回やら、既に私たちの社会であられもなく起こりつつある「政治的不寛容」を、名古屋市長の極右的志向も含めて、より顕在化させたという点で矢張り意義深いと思う。

そのあいつりメイン会場の一つ、四間道・円頓寺エリアで、秋分の日に始まる六日間、JIA 東海支部大会、「けんちくかフェス」が催された。平仮名表記のその職能的呼称の後に「フェス」などという「ノリ」を重ねた、思わず身悶えしそうなタイトルからは、市民に開かれた建築家の、親しみやすさを感じる事もできようか。とはいえ、アートを横目に「フェス」会場前に立ってみれば、恐らくほぼ JIA 関係者のみが集った、左程大きくもない会場からは、周囲の華やかなお祭ムードに向けて、愉快的ほど「異質な」人びとの空気感がこぼれてきた。それはさながら同じエリアにアートとはまた異なるレイヤーが重ねられたようでもあった。

私が参加したのは、「これからの建築とまちづくりを考える」と題されたレクチャーで、長い時間をかけて賑わいを取り戻してきた円頓寺に如何にも相応しいが、気になるのはチラシにある「建築基本法って何?」という副題。恥を晒せば、私は「建築基本法」なるものがよくわかっていないのだ。

それでどうだったのかというと、悲しいかな相変わらずよくわからない。多分他の方々には、前提としての知識も意識も共有されていたのだろうけど、そもそもそれを持ち合せない私は、動機付けが見えない上、「理念としての建築の憲法」という議論もよく飲込めず、別レイヤーでは文字通りその 21 条が取り沙汰されている最中、やや戸惑う。

そんな中、中谷礼仁氏の「千年村プロジェクト」には強く惹かれるものがあった。改めて HP を確認すると、「〈千年村〉とは、千年以上にわたり、自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が持続的に営まれてきた集落・地域」であり、2011 年の震災後、「優れた生存立地を発見しその特性を見出す必要性を感じた」ことが動機として掲げられ、「全国の〈千年村〉の収集、調査、公開、認証のプラットフォームとして構想され」た、とのこと。認証まで独自に行っているのである。

「千年も続いた村はいい村である」(そりゃそうだ)という明快な基準は無論、面白いのは、通例歴史的な持続性の指標となる「風景」や「景観」といったものではなく、営まれている人間の活動、その「構造」の持続に着眼している点。驚くべき事に、講演中に動画として紹介された、青々とした田んぼが広がるその真ん中を新幹線が暴力的に分断するという、そんな風景をも〈千年村〉は許容するという。その上で尚、その認証は極めて実証的なのである。

歴史など生鬻りの身としては図々しい

が、話を聞いた後、歴史や持続性といった事柄への意識が幾らか変わりそうな気がした。例えば、あいつりの問題には、狂信的ナショナリズムとそれを煽る為政者たち、あるいは修正主義者たちの存在が絡まり合っている。勿論私たちは近代的アイデンティティとして大なり小なり歴史の「物語」を内面化するが、しかしおよそ私たちの「市民感覚」から乖離した「誇大妄想」のような国家が、なし崩し的に現れてしまうのではないかという昨今、近代国家に付きものの、ロマンチックな起源論も神話もない実証的な評価としての歴史的持続性というのは、その全国的な広がりや踏まえれば、むしろ多様で健全な、共同体的郷土愛の契機になるのではないかと。中谷氏の肩書きが「歴史工学者」となっている通り、まさしくそれは歴史の「工学」である。

狂信が常態化すれば、それ以外は「非国民」か「反日」である。漏れ伝わる噂では、JIA 界限でも、為政者側の空気を忖度する気配はかねてあり、ネオリベ的な優勝劣敗を喧しく礼賛するのみならず、差別的な物言いにさえ躊躇のない「立派な」方々がおられる——どころか、そんな破廉恥な声に賞賛さえ辞さない会員までいる、などと聞けば心は穏やかではない。



道家 洋 (JIA 愛知)
道家洋建築設計事務所 / LoTeks



けんちくかフェス❖支部大会2019

❖参加学生の声

「けんちくかフェス」に参加して

はじめまして! NAGOYA Archi Fes 2020 代表の北川佑亮です。私たち NAF は、「天使の森プロジェクト」や「まちなか井戸端会議」、「アップデート会」を中心に参加させて頂きました。天使の森プロジェクトでは普段学生だけではなく議題に上がらないような SDGs のお話を六鹿会長からして頂いたり、小原社長の成功体験や今後の展望を聞かせていただいて、学外での学びを求める我々にはとても良い経験となりました。また、JIA の東海支部コンペに有志のメンバーで挑戦し、その過程をけんちくかフェスにおける井戸端会議やアップデート会でサポートしていただき、アイデアやモチベーションの向上に繋がりました。中でも、井戸端会議では浅井さん、栗

原さん、田中さんをはじめとする建築家の方々に、自分たちのアイデアに直接意見を頂き、その上で議論させて頂いたのは非常に有意義で、何より楽しい時間でした。

我々 NAF2020 は、「中部建築界の活性化」を基本理念として、中部卒業設計展をはじめとした様々な活動を行なっています。けんちくかフェスのような機会は、普段学生だけのコミュニティで蓄えているエネルギーや気持ちを社会に発散する素晴らしい機会です。これを機に NAF を建築家の方々に知って頂いたり、建築に普段関わっていない方々にも学生が建築を積極的に学び楽しんでいる姿を見て頂くことができたと考えています。今後も中部建築界の活性化を志す建築家の

方々と建築学生の間で、多様なコミュニケーションを築き、社会に発信するとともに、何より建築を楽しみたいと思っています!



北川 佑亮

(名古屋工業大学 3年)

NAGOYA Archi Fes 2020 代表

❖全体総括

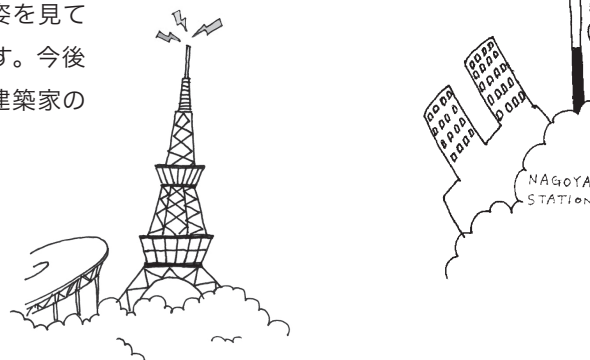
「けんちくかフェス」を振り返って

「けんちくかフェス」に参加いただいた JIA 会員のみなさま、実行委員のみなさま、多くのお付き合いいただいたみなさま、ありがとうございました。感謝いたします。今回の「けんちくかフェス」が一過性のイベントではなく、今まで積み上げてきた委員会活動や事業のまとめであり、これからの活動のキックオフになることを望みます。地域会長就任から「JIA は建築家のコミュニティ」を叫んできました。今回は本部の六鹿会長をはじめ多くの JIA 会員、会員以外のさまざまな考えや立ち位置の建築家や専門家に参加していただきました。多様な建築家の交流・衝突・刺激が今回の「けんちくかフェス」の成果であって欲しいです。また、フェスの形式は「市民と建築家」のつながり方のイメージを提示させていただいたつ

もりです。建築家が真剣に議論している姿を一般の市民に見ていただいて、建築家の熱意や姿勢を知っていただくもので、グランドレベル・街路での開催にこだわった理由です。

ベテラン、若手、男性、女性にかかわらず JIA に参加されていない多くの建築家があります。建築家は群れるべきでないという信念をお持ちの方、参加のキッカケを失った方、敷居が高いとお感じの方、これらの方々にも常に情報を発信し続けるべきです。これからの JIA は大きく門戸を開いて多様性を持ち、議論をし、交流する「建築家や建築士」の「台風の目」になりませんか。「台風の目」は小さなものですが台風を中心であり大きな渦と関連・対応しています。これからはますます JIA 単体では存在価値が薄くなります。

団体や会員にこだわらず「建築家・建築士のコミュニティ」の「芽」となって「社会での建築の向上」を引っ張っていくことが求められると考えています。



円頓寺商店街のアーケードの下で「街路」を挟んでのパーティー



吉元 学 (JIA 愛知)

愛知地域会長

わたしのとっておき 14

「馬場家住宅」訪問

ひょんなことから重要文化財「馬場家住宅」の現当主が私の中学の同窓生と知り、訪ねて行くことにした。

馬場家の伝承によると、先祖は武田信玄の家臣馬場美濃守信治の縁者とされ、武田氏の滅亡を機に当地を開発。江戸時代には広大な田畑を持ち、当地の領主である諏訪高島藩藩主と親密な関係にある特別な地位にあり、現当主によると庄屋とかではなく武士だそう。当時は屋敷の周りの見渡す限りの土地は馬場家所有であったが、現在は



□表門：左右に長屋を持つ長屋門 安政6年(1859)

1.3ha程度とのことで、土塁と堀で囲われた屋敷地の半分を松本市に寄贈している。

左右長屋のある表門をくぐると切妻造の主屋があり、文庫蔵、隠居屋、奥蔵、庭の一角の茶室などで構成されている。主屋の南側の坪庭は見事であり、藩主は表玄関からではなく、坪庭から座敷に入ってきたとのこと。主屋は一度解



□主屋：切妻造 嘉永4年(1851)

□イシカワ(廊下)：
半アーチ状の天井と
書院欄間(透かし彫り)



体後復元され、旧馬屋の「松本市指定重要文化財」以外の建物・土地がすべて「国指定重要文化財」となっている。

屋敷にはケヤキの大木が多く、表門西側「祝殿」横の大樫は樹齢800年と言われ、市特別天然記念物。馬場氏によると現有建物、土地を維持するのは非常に難しく将来はどうするか悩んでいるようだ。

住所：長野県松本市大字内田 357 番 6



谷村 茂 (JIA 愛知)
アール・アンド・エス設計工房

JIA 愛知保存研究会

保存情報

第217回

登録有形文化財 長母寺

昨年まで毎月1回、白壁アカデミアの研究講座で、「尾張名所図会今昔巡り」、「八幡巡り」、「尾張・三河仏像巡り」などをテーマに、尾張、三河、美濃、飛騨、伊勢、時にテーマを拡大、足を伸ばして志賀、京都、神戸まで、10名前後の高齢受講生を引率し、名古屋～愛知県内では観光振興も意識して歩いた。名古屋には十分、人を案内する価値のある名所、社寺が多数ある。にもかかわらずそこを訪れる人が少ない場所が多いのが残念である。

その結果、人を案内するに足る可能性を持つ候補地を歩き尽くした感があり、上記研究シリーズを20年続けたのを節目に、昨年、終止符を打った。これまでこの保存情報では白壁長久寺、高針蓮教寺、大高春光院、東の寺町などを取り上げた。今回は東区矢田3丁目、庄内川沿い断崖の南に建つ長母寺(以下、文中では寺と言う)を紹介する。

もともと寺は矢田川の北、守山側にあったが1767(明和4)年、大雨による矢田川決壊を期に流路が代わり、矢田川の南になった。

寺は鎌倉武士、山田重忠が母の長母院のために創建、天台宗龜鏡山栴尾寺と称した。山田重忠は源頼朝により山田庄の地頭に任じられ、ご家人に列したと言われる。

その後、寺は北条、足利、織田など武家の庇護を得たものの衰退、後に無住を開山とする禅寺とし、その後、衰退～再興を繰り返し、近くは尾張二代藩主光友の命により再興したとされる。

境内に入ると、特徴のある階段のアプローチを登って山門に至る(写真1)。これが江戸後期建築で、以下の棟と比べると最も古い。

尾張名所図会4巻(図1)に江戸末～明治初期の姿を伝えるが、本堂は1894(明治27)年の建立である。名所図会の本堂は棟の長さが心持ち短い、明治になると棟が長くなるのは尾張の特徴のようである(写真2)。

玄関を挟んで本堂の東(右手)に庫裏が配置される姿は(写真3)、尾張名所図会に見る他の尾張の社寺の配置と共通する。庫裏は江戸～明治～大正と増築が繰り返されているが江戸期建築の部分を遺し、中に入ると、柱・梁の建物の構造部の古さや竈など、歴史を感じさせる印象強い。

寺の北は庄内側川断崖で、寺の中は墓地にしているが、ここからの春日井方面の眺望がよい(写真4)。観光寺と言うと適切だが、寺の文化財としての価値、断崖から見る風景を生かして、寺の持つ魅力アップが出来ると思うのだが。



図1 尾張名所図会 巻4から



写真1 山門

写真2 本堂



写真3 庫裏

写真4 庄内川から春日井方向の眺望

概要 総建:1179(治承3)年/宗派:臨済宗東福寺派(創建時天台宗)/名称:靈鷲山長母寺/文化財:重文 木造無住和尚座像・登録文化財 平成11年11月指定 本堂、庫裏、山門/建設年:本堂 1894(明治27)年・庫裏 1828(文政11)～1925(大正14)年・山門 江戸後期/所在地:名古屋市区東区矢田3-13-71/アクセス:名鉄瀬戸線矢田駅から徒歩5分、地下鉄、ガイドウェイバス・ナゴヤドーム前矢田から10分 JR大曽根駅から徒歩15分



関尾 利勝 (JIA 愛知)
地域計画建築研究所

地域会だより

■静岡地域会

<報告>

・11/15 静岡地域会役員会の開催

■愛知地域会

<報告>

- ・11/1 第6回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」
- ・11/3 天使の森植樹祭
- ・11/8 第7回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」
- ・11/12 第2回建築家+特別委員会
- ・11/15 第8回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」
- ・11/15 賛助会・CPD研修
- ・11/18 愛知地域会選挙管理委員会
- ・11/19 行政WG名古屋市宮繕部長打合せ
- ・11/22 第9回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」
- ・11/25 事業委員会・名古屋市立猪高小学校建築教室
- ・11/29 第10回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」
- <予定>
- ・12/6 第11回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」

- ・11/15 第8回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」
- ・12/12 事業委員会・岐阜地域会合同会議
- ・12/13 第12回名古屋市立大学講義「建築家の仕事」

■岐阜地域会

<報告>

- ・11/29 建築研修会 場所：多治見市タイル工場見学
多治見市モザイクタイル
ミュージアム
中津川市苗木城跡（城跡、資料館）

■三重地域会

<報告>

- ・11/8 東海支部持ち出し役員会 四日市市「伝七邸」にて
伝七邸見学、四日市旧港湾湾施設見学、
四日市コンビナート夜景クルーズ、懇親会
- ・11/9 建築ウォッチング「瀬戸・多治見 焼き物三昧の旅」
- <予定>
- ・12/7 第6回例会
会員研修 環境セミナー 講師 清野新氏 (Arup)
「Building Physics in Arup」他地域会参加可
三重大 レーモンドホールにて
- ・1/18 建築文化講演会 講師 大西麻貴+百田有希氏
三重県立美術館にて

Bulletin Board

JIA ゴールデンキューブ賞 2019/2020

「子どもを対象とした建築/まちづくりの教育活動」募集

提出締切：2019年12月6日(金)17時<必着>

提出先：〒460-0008 名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

(公社)日本建築家協会東海支部事務局 JIA ゴールデンキューブ賞係

主催：公益社団法人日本建築家協会 JIA ゴールデンキューブ賞 2019/2020 実行委員会

JIA ゴールデンキューブ賞に関する詳細は、下記

ホームページを御覧ください。応募ガイドを参照し、
応募申込用紙、応募用テンプレートなどをダウンロードの上、ご使用ください。

<http://www.jia.or.jp/goldencube/>



第21回 まちとすまいの集い

名古屋は面白い！都市名古屋の過去、現在、将来

都市名古屋が持つ面白さを、過去、現在、将来の都市計画の視点に立って紐解いていきます

日時：2019年12月14日(土)13:30～17:20(受付開始13:00)

場所：名古屋大学環境総合館1Fレクチャーホール

参加費：入場無料、事前申込制【100名】

申込み先：右のQRコードからアクセス頂き

PDFをご覧ください。

問合せ先：名古屋大学建築学教室

まちとすまいの集い事務局(担当：後藤)

E-mail: n.goto@nuac.nagoya-u.ac.jp



編集 後記

●今月は9月号で
ご案内したフェスの
報告と総括の号に
なりました。会場と
なった円頓寺商店
街と那古野四間道
エリアは尾張の歴
史を語る貴重な建物が残る保存すべき一帯で
す。我がプリテン委員会は9/26広報室の「コン
ペのアップデート会」のお手伝いをしました。名
古屋の大学生(NAF)の皆さんにご参加いた
だき、学生さんの試案にコメントしてグループディス
カッションするWS形式の会です。課題や条件へ
の発想や思考の過程展開をリアルに感じ、共に
考える事が出来てとても楽しく刺激ある機会でした。
3/29キックオフの大会実行委員会以来、毎月役
員が企画を持ち寄り、会場確保や飲食の場を手
配。登壇者の変更など有りましたが、台風の影
響も無くフェスを終える事が出来ました、各位ご苦
労様でした。吉元会長の「市民と建築家のつな

がり・コミュニティーの芽となり牽引する事」に関し
ては、今回に限ることなく市民の皆様への情報発
信に反省改善の余地が有る事を今後に繋げたい
と思うところです。
(伊藤彰彦)

●この ARCHITECT も 375 号の今号まで私たち
を結びつける機関紙として多くの会員諸兄の活動
を紹介、支部独特の色に染められた冊子として
届けられてきました。結果として私の中には毎月
郵送されてくるその冊子を手にしたとき会のロゴ
タイプを見るがごとく、この冊子自体にある種の
アイデンティティを感じています。今号も「東海支
部大会」の盛況ぶりや街に飛び出した活動の報
告、岐阜地域会「JIA の窓」の幅広い人々を
巻き込んだ活動報告が掲載されています。新し
い JIA の姿が読み取っていただけるかも知れませ
ん。日本中を興奮の渦に巻き込んだラグビーワ
ールドカップも 11 月で全日程を終了。One Team な
どの流行語大賞候補を残して、再び静けさを取り
戻していますが、この 12 月号の各記事にも一体

感あふれる令和の時代の JIA が垣間見られるよう
な気がします。東海支部の「One Team」の高まり
を感じられる活動を紙面でご覧になりこれからも
「ARCHITECT」の応援よろしくよろしくお願いします。
(黒川喜洋彦)

ARCHITECT

第 375 号

発行日 2019.12.1 (毎月1回発行)

定価 380 円 (税込み)

発行責任者 矢田義典

編集責任者 中澤賢一

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会プリテン委員会
(有)イヅミ印刷所内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail: shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>

実際に人が暮らし始めた住宅を、その設計者の案内で拝見

10月5日(土)に「JIAの窓」が開催された。当初は7月の開催予定であったが不運にも台風の直撃により延期となってしまった事業である。仕切り直しとなった当日は爽やかな秋晴れに恵まれ、定員枠に達する参加者を迎えて賑やかに開催することができた。

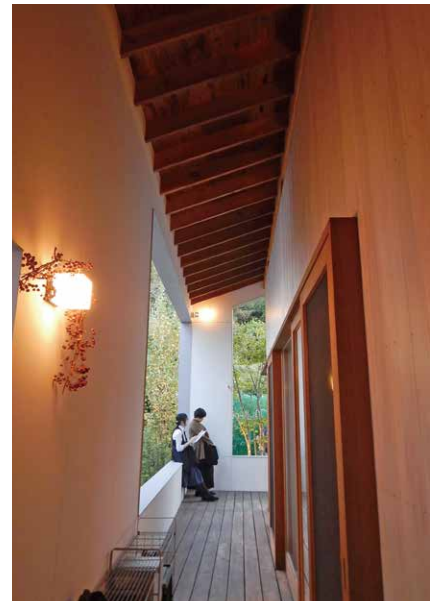
「JIAの窓」とは岐阜地域会員の勉強会を開かれた場「窓」として催すことで、会員関係者だけでなく学生や会員以外の設計者などからも広く参加を募り、JIA活動の広報さらには会員拡大につなげようという趣旨で定期的に開催しているものである。

今回の参加者では学生さんやメーカー勤務の設計者など、幅広い年齢・職種からの参加が見られた。

見学会概要

今回は「岐阜の若手建築家住宅作品～暮らしの様子を訪ねる旅～」と題した見学会として開催された。竣工後何年か経ち現在でも実際に人が暮らしている住宅を、その設計者の案内で拝見できるという貴重な体験の場である。岐阜近隣エリアにある、若手設計者による建物を選定して見学ルートが計画された。

一般生活を送る中にお邪魔するという状況になるわけだが、設計者の協力と施主の理解により3件の住宅を拝見することができた。



・加納馬場の家

掲載誌：新建築住宅特集 2018.10
第30回すまいる愛知住宅賞愛知県森林協会会長賞

初めに訪れたのは、シンプルな切妻ヴォリュームの一部が大きく切り取られた外観が特徴的な「加納馬場の家(設計者：小林アツシ氏/スミレ設計室)」である。

大きく切り取られた部分は車庫としてだけでなく、多趣味な施主の生活を受け入れる半屋外スペースとして計画してある。中に入ると車庫上部の西側ヴォリュームと東側の床レベル差を巧みに利用して構成された魅力的な空間となっていた。また「窓としてではなく視線の抜けるところそうでないところ」という検討をしたという開口の配置が心地よく感じられた。北側は下屋を配置し屋根勾配を大きくすることで高さを抑え、北側隣地の住宅にも配慮したという設計者の説明に感心しながら見学させていただいた。

暮らしの様子を訪ねる旅

オープンハウスなどの形で竣工直後の建物を見学する機会はあるけれども、施主家族が現に生活している中をお邪魔して見学する機会は稀である。そんな稀なスタイルの見学会は、施主と設計者の信頼関係があり、またその設計者とJIA地域会の地域に根差したネットワークがあってこそ実現させて頂けたのだと思う。お邪魔した建物はいずれも施主によって魅力的に使いこなされており、竣工後も続く設計者と施主の良好な関係が建物の魅力をさらに増幅させている様に、設計とは単なる作品づくりではないのだということを再認識させてくれた貴重な機会であった。

・SLBH1

掲載誌：新建築住宅特集 2018.6
第6回東海住宅建築賞優秀賞

次にお邪魔したのは今年度のJIA東海住宅建築賞大賞となったSLBHシリーズの最初のモデル「SLBH1(設計者：河合啓吾氏/TAB)」である。材料モジュールからセルフビルドと職人作業の仕分けまで、施工も含めた徹底的な合理化を検討して実現した空間は、コスト調整の結果に見えてしまう「あきらめ」とは異なる独特の魅力が感じられる空間であった。また、設計者の明るいキャラクターから垣間見える施主との楽し気な関係と施工上の様々な工夫からは「ものづくり」の面白さに改めて気づかされたように思う。

ちなみに「SLBH」とは「スーパー/ローコスト/ビック/ハウス」の略であり、この後にさらに3作も続くとは全く想像していなかったとの事であった。

・コヤナカハウス

掲載誌：新建築住宅特集 2018.9

最後に訪れたのは、岐阜地域会の会員が設計した自邸「コヤナカハウス(設計者：寺下浩氏/寺下浩一級建築士事務所)」である。

設計者自身の生家での原体験から着想したという、緑の風景を大きく取り込んだ空間づくりは非常に心地よく、山の緑を眺める「外の窓辺」とも形容できる半屋外のデッキにはずっと座っていたい誘惑があった。内部においても、諸室の関係や視線まで細やかに配慮されており、細部まで意識が行き届いた設計には、すでに2件の見学を済ませて少し疲れたなかでも興味を掻き立てられ、あちこちを歩き回らせていただいた。



山田 尚紀

株式会社デザインボックス